

ひるがえって、我々の眼前に与えられている日本語訳経典は文質よろしきを得ているのであろうか。その判断をする能力は私にはない。多くの有能の識者と将来の仏教の歴史がその証明をなすであろう。ただ私としては、ただわからない御経を読んで良しとする態度と、わかるように訳された御経だから良いのだと考えるような態度とは、両方ともに取りたくないと考えている。前者のような態度に對してはすでに古い時代の日本の仏教者にも、漢訳大藏経に拠りつつも、仏教の精髓に思いをいたし、わかりやすく教えを示した責任ある人の居たことを主張すべきであらう。後者のような態度の人に対しては、釈道安の五失本三不易や玄奘の五種不翻にみられるような慎重な態度を要求しよう。今や、日本は経典の大翻訳時代であるからには、翻訳者は、羅什の誇りを誇りとし、玄奘の氣概を氣概とすべきであらうが、同時に訳経が訳者の思想の表白であるということに思いをいたして責任ある態度が要請されよう。

さて、我々は一体何を為すべきであらうか。従来の漢訳大藏経をなげすめて、新来の日本語訳仏典のみ拠るべきであらうか。あるいは新しいものの価値を認めず、旧来の漢訳大

藏経を墨守すべきであらうか。今や我々は改めて仏典を読みなおし、従来の漢訳大藏経と新出の日本語訳仏典との同異を確認しつつ、再び仏陀の教えに迫ってゆく模索を開始すべきであらう。そのためには、従来の宗学のような単なる伝統墨守の態度と、文献学のような伝統無視の姿勢との双方を離れて、今、ここにおける自己において、仏教の総体を問う仏教思想史の立場が確立されなければならぬと思う。現今の仏典の大翻訳時代の到来は

納富常天著

『金沢文庫資料の研究』

一

中世の歴史を研究する者にとって、とりわけ中世仏教史を考察せんとする者にとって、金沢文庫の持つ意味の大きさは量り難いものがある。鎌倉期、金沢北条氏によって經營された金沢文庫、及び学山称名寺の資料を保管

千載一遇の好機縁であり、一切経を読み、大藏経を拈来拈去して、仏教を惟うべきであらう。その意味で、大藏経の何たるかを考えさせた今の両冊の刊行は、誠にタイムリーなものであったと言えよう。

〔羅什〕大藏出版、一九八二年二月十日発行、二〇〇〇円、B6版、本文二五〇頁、年譜七頁、図版一頁、『玄奘』大藏出版、一九八一年十二月一〇日発行、二、五〇〇円、B6版、本文三四一頁〕

中 尾 良 信

する博物館としての新装金沢文庫が、称名寺境内に設置されたのは昭和五年のことである。その蒐蔵資料は国史・国文・国語・儒教・社会経済・美術等、極めて多岐にわたるが、中核は仏教関係であり、内容的には真言・天台・華嚴・戒律・法相・三論・浄土・禅等、新旧両仏教に及び、更に唱導・声明・絵

図をも含み、重要な学術資料の堆積である。

右の如き資料は今日補修を加え、整理されて、順次展示されており、我々の眼に触れることができるとともに、その中の何点かは国宝・重要文化財の指定を受けている。しかし新装金沢文庫の設置以前、称名寺の末寺である光明院に保存されていた時点では、数箇の櫃に納められた反古の山というに等しかった。初代文庫長関靖博士の手によって、整理調査が開始されて以来、その作業は今日に至るもなお完遂されていない。途次、『金沢文庫古書目録』『金沢文庫古文書』の上梓、昭和四十八年度以降の『金沢文庫資料全書』刊行によってかなりの数の資料が紹介されているが、散佚・遊離・混乱・虫損の著しい中で、調査研究の進展は困難を極めているといえるであろう。

著者は昭和三十年、金沢文庫に就任以来、神奈川県立博物館学芸部長であった二年間を除き、文庫長としての今日に至る二十五年を費して、資料整理とその積文研究に努めてきたのであり、いわばその集大成が本書である。

二

金沢文庫資料を中心とする研究論文は決し

『金沢文庫資料の研究』（中尾）

て少なくない。著者も触れているが、浄土関係が約四十篇、華嚴関係が十五篇、その他天台・真言・戒律・禅・声明・神道関係が各々数篇、資料に触れる程度のものを含めると相当数のぼる。しかし金沢文庫そのものに対する巨視的な研究となると、あまり多くはない。その嚆矢とすべきは、初代文庫長関靖博士の『金沢文庫の研究』であろう。

関博士は二十余年の文庫長としての期間、資料調査を第一歩から進められ、その整理研究の結果、金沢文庫の創建を巡る事情、経営者金沢北条氏のこと、文庫の歴史、金沢文庫の意義、金沢文庫印等、金沢文庫に関する基本的な歴史と内容を明らかにされた。就中「金沢文庫印」として一章を費し、確認された三十数種の文庫印を整理点検した上で、一々について真偽原模を判定されている。従来より文庫印については諸説があり、印記の有無、その朱墨等が、資料の価値決定の重要な手掛りとなることもあり、文庫印の種類・使用目的・使用期、更には捺印の方法にわたる詳細な研究は、金沢文庫資料を研究する上で大きな指針となるものである。

他に金沢文庫の名を冠した研究書としては結城陸郎博士の『金沢文庫の教育史的研究』

がある。結城博士は金沢文庫資料の中の写本について、その書写人や書写場所を検討した結果、それらが本来称名寺文庫に帰属すべきことを述べられている。そしてそれは金沢学校、すなわち称名寺談義において優秀な僧侶を育成するテキストとして、文庫本が利用される頻度によるものであり、世俗文庫である金沢北条氏の金沢文庫は、公家文化と武家文化の接点上にあって、称名寺文庫と一元的に発展したものとされる。つまり金沢学校（称名寺談義）の存在こそが教育史的に意義深いものであり、そのことは文庫に所蔵される古文書や典籍の識語から考察し得るといえるものである。

右二書が、金沢文庫を総合的に考察した研究書の双壁であろう。関博士は金沢文庫の成立から今日に至る歴史と、金沢文庫本の定義付けをされ、結城博士は金沢文庫と称名寺談義の関係の中で、金沢文庫の発展と教育史的意義を解明されようとしたといえる。

三

『金沢文庫資料の研究』は、右二書と同じく書名に金沢文庫と冠し、総括的研究書であるが、右二書とは考察の立場を異にすること

はいうまでもない。しかし或る意味では、右二書によって形作られた研究史の、延長線上に位置づけられるべきものである。

本書はいわば論文集と呼ぶべきであり、著者自身が述べているように、昭和三十九年以降約十五年間の論文の中から、金沢文庫資料に関するもの三十五篇を選択し、五編に分けて構成されている。以下その内容を簡単に紹介してみる。

第一編「東国仏教と金沢文庫」は文庫資料の総括的な研究である。「金沢文庫資料について」では資料の中核を為す仏典について、その内容を概説し、「金沢文庫と華嚴典籍」「鎌倉における華嚴教学」では金沢文庫所蔵の華嚴関係の資料と、それを通じて知り得る華嚴学の東国流入の経緯と、鎌倉における華嚴学の実態を述べている。「東国仏教における出版文化」においては、相州靈山寺版・鎌倉極楽寺版・称名寺版等鎌倉を中心とする開板事業を通して、「東国仏教における外典の研究と受容」では金沢文庫本『弘決外典鈔』等に代表される外典研究を通して、いずれも東国仏教教学の特質を考察している。最後に「金沢文庫資料における諸印記」として金沢文庫印・寺院関係蔵書印・個人関係蔵書印等

現在までに判明しているものについて、関博士の成果を踏まえつつ考察している。

第二編「金沢文庫の稀覯資料」は、十二の稀覯資料と久米多寺関係資料を取り上げ、その学術的価値を紹介している。資料名は以下の通りである。

- (1) 律宗瓊鑑章
- (2) 百巻抄
- (3) 華嚴十玄章
- (4) 華嚴經綱要
- (5) 十二因縁觀門
- (6) 華嚴触会一乘義章明宗記
- (7) 心要洞玄記
- (8) 明恵上人法語付明恵消息
- (9) 大明録
- (10) 選択集述疑
- (11) 念仏助行要文抄
- (12) 管蠡抄

(13) 泉州久米多寺関係資料

第三編「中世の学山称名寺」は、学山としての称名寺の成立過程や、最盛期の宗教活動の実情を解明している。「称名寺結界図について」「称名寺の基礎的研究」では、結界図における問題点と、北条実時の阿弥陀堂と称名寺草創の関係を考察すると共に、称名寺開

山審海・二代観阿について、関係資料からその行実と問題点に論及している。「室生寺と称名寺観阿」は『忍空授観阿状』を手掛りとして判明する僧名・寺名等と、観阿と室生寺の関係について、「称名寺における伝法灌頂」は、五十通以上の古文書資料によって、鎌倉末から南北朝にかけての称名寺乃至鎌倉における伝法灌頂の実態と、密教事相の動向について述べている。

第四編「湛睿の研究」は、著者の主要研究対象である称名寺三代湛睿に関する考察である。「湛睿の基礎的研究」では湛睿関係の古文書・典籍資料を分類し、「湛睿の華嚴教学」において行実一覽を掲げ、その教学の中心である華嚴教学及び著書を考察すると共に、湛睿が積極的に受容した華嚴・戒律を中心とする宋朝教学についてを、「宋朝教学と湛睿」で触れている。

第五編「文庫資料をめぐる諸問題」は、文庫資料を基とした種々の問題を提起している。「泉涌寺開山俊傍と永平道元」は、北京律の創始者俊傍律師と道元禪師が師弟関係にあったことを示す『教誠儀鈔』を紹介し、その宗教的・歴史的意義を考察し、「東山泉涌寺における禅受容」では、その俊傍と弟子

月翁智鏡の禪受容と、蘭溪道隆の來迎院駐錫に触れている。「明恵の『持戒清淨印明』について」は、明恵上人高弁研究の一環として、『持戒清淨印明』の成立と伝播を述べている。「金沢北条氏における宗教受容」では、実泰―実時―頭時―貞頭―貞将の金沢北条氏直系の、称名寺を中心とした宗教受容の実態を、「金沢貞頭と東山常在光院」は、鷲峰山常在光院の草創期の動向と、寺檀關係を結んで外護した貞頭について考察している。最後に「三浦義村の迎講と伊豆山源延」では、鎌倉武士階級の念仏受容と三浦一族の宗教受容を通して、三浦義村の迎講の意義を述べている。

四

前にも述べたように、本書は著者の約十五年間にわたる論文を、蒐集構成して一書と為したものである。各々の論文間には脈絡がなかったもので、体裁が一応整えられてはいるものの、多少不統一の感を免れないのは、右の事情からしてやむを得ないであろう。しかし数量的統計や、特に目新しい新出資料がある場合には、註記や後記の形で補われているのであまり問題はないと思われる。

また各論文の収録誌を見ると、『印度学仏

教学研究』のように一般に座右に近い雑誌もあるが、『金沢文庫研究紀要』『金沢文庫研究』『三浦古文化』の如く、個人の手に入りにくいもの、仏教学關係にはあまり知られていないものが、一書にまとめられたという点でも利用価値が高いと思われる。

昭和二十六年に関靖博士の『金沢文庫の研究』が刊行されて、三十余年の時を経て本書が刊行された。昭和三十年に金沢文庫に就任した著者の研究歴は、いわば関博士の成果が出された時点から出発しているといえる。いい換えれば、関博士の成果を点検しつつ、それを土台とした金沢文庫資料の研究を展開するということであつたと思われる。その意味では本書に収録された論文は、そうした研究の成果と呼ぶべきであろう。関博士は文書資料を子細に点検整理することによって、金沢文庫そのものの歴史と、金沢文庫本の意味を定義附けられた。結城博士の場合は、金沢文庫の發展経過について新しい見方を提示されたが、いまだ典籍資料を中心として個々の資料を分析し、その意義を考察するには至らなかった。本書に収録された各論文の立場は、金沢文庫資料の調査研究を通して、鎌倉を中心とする中世東国仏教の趨勢という点を意識し

たものである。

個別にいえば第四編の「湛睿の研究」が、南都と東国にわたって活躍した湛睿の、これまであまり知られなかった行実や、教学を解明している点で意味深い。第五編「文庫資料をめぐる諸問題」の各論文は、種々の示唆に豊んでおり興味深い。特に道元禪師と俊苾律師の關係は、極めて大きな問題を含んでおり、他の論文も同様であるが、今後更に傍証と検討を加えなければならぬ。第二編「金沢文庫の稀覯資料」についても、本書における資料の紹介によって関連方面からの調査研究が為されなければならないであろう。もう一つ本書の特質を付加えるならば、八十五頁を費した詳細な索引である。書名・人名・事項・寺社名・地名に分類されており、本書の利用価値を高めていると同時に、資料名の多さという特徴を物語っているといえよう。

原資料を扱う論文は、新出資料の発見によって傍証を得る場合もあり、反証される場合もあるが、いずれにせよ改変される宿命を背負っている。しかしこうした手続きを経ることによって、思想史の形成も可能といえるのである。その為にも文書・典籍を問わず、残された資料を整理検討し、その意味を探り、

思想史の中で正しい位置付けをすることが、
 原資料を扱う者の使命であろう。本書は、金
 沢文庫に残された膨大な資料を、思想史に位
 置付ける作業の一環と捉えることができると思
 われる。従って、繰り返しになるが、本書

の意義も達せられるのではあるまいか。
 右は極めて拙なる紹介文であり、著者の意
 を十分汲み得たものではない。最後にその点
 を、著者並びに読者諸賢に陳謝する次第であ
 る。

紹介の資料や論説が今後更に検討を加えら
 れ、新しい成果を生み出してこそ、本書刊行

(法蔵館、昭和五十七年六月発行、A5版、
 本文六一二頁、索引八五頁、一四〇〇〇円)

古田紹欽・田中良昭著

『慧能』(人物 中国の仏教)

石川力山

一

能の生涯にすることが可能なのではなからう
 か。

中国禅宗に限らず、日本禅宗の研究を行う
 場合でも、中国禅宗六祖の慧能を無視し、あ
 るいは理解なくしてこれを進めることは、お
 そらく不可能であろう。中国禅宗初祖として
 の存在は達磨であることはいままでもない
 が、禅宗の思想を論ずる場合には、六祖慧能、
 あるいは『六祖壇経』の存在に必然的に突き
 当る。ある意味では禅思想のすべての淵源、
 禅僧の風格のあらゆるパターンの原型を、慧

ことほどさように、禅宗の中で六祖慧能の
 占める世界は巨大であるが、世の評価や位置
 付けの割に、その研究は進んでいない。それ
 はやはり、達磨像の世界と同様に六祖慧能の
 生涯についても、後世の伝説的附加部分が多
 く、祖師像の変遷が著るしかったことに起因
 しよう。それはとりもなおさず、祖師像とい
 うものが慧能を中核に展開したことを示すも
 のであるが、一方で、実像としての慧能像の

実態がうすれて、虚像としての慧能像だけが
 大きくふくれあがったことも事実であろう。
 近代になって、敦煌莫高窟より発見された
 多数の典籍の中に、すでに失われてしまった
 と思われた初期禅宗に関する貴重な文献が多
 数含まれていることがわかり、初期禅宗史の
 研究は飛躍的に進んだ。鈴木大拙、宇井伯寿、
 胡適等の諸博士の業績によるものであり、近
 年では関口真大博士、柳田聖山先生等の御研
 究が異彩を放っていることは周知のとおりで
 ある。

初期禅宗史研究がこのように進展する一方
 に於て、『六祖壇経』の研究等もやはり大き
 な進展を見せたが、六祖慧能の全体像に関す
 る研究は、さほど大きな成果を生まなかった。
 本書の著者の一人である田中良昭先生がリ
 ダーとなって研究を続けている、駒沢大学禅
 宗史研究会が先年まとめた『慧能研究』(昭
 和五十三年三月、大修館書店刊)は、そうし
 た中で、はじめて六祖慧能の全体にかかわる
 網羅的研究の先駆となった成果であったとい
 える。

しかし、この『慧能研究』も、その副題に
 「慧能の伝記と資料に関する基礎的研究」と
 ある如く、その内容は、『曹溪大師伝』の研